

ヘレニズム都市メッセネの発掘に参加して
－ S 先生への手紙 －

長田 年弘

はじめに

筆者は一九八九年から三年半にわたってオーストリアの S 市に留学し、西洋古典考古学を学んだ。その際指導教授の好意によって、一九九一年と一九九二年の二回にわたり、ギリシアのヘレニズム都市メッセネ（現メッシニ）の発掘に参加する機会を得た。いずれも八月に行われた発掘を終えると、私は留学先の S 市の学生寮に戻り、そこから日本の先生方友人に手紙を書いた。ギリシアの考古学を学んでいる者にとっては現地での発掘など貴重な機会なので、一ヶ月の見聞を思い出し気持ちを整理するのを兼ねて、長文の手紙をしたためた。以下の二通はいずれもそうした書簡である。どちらもあくまで私信であって公表するような性質のものではないが、長期にわたる外国滞在のために精神的にいささかまいっていた時期の手紙で、今見ればそうした留学当時の精神状態がよく現れているようにも思われ、また様々な国の様々な文化にぶつかってその時はそれなりに考えにふけたことも記してあり、自身には愛着があって捨て難く思われた。読み捨てて頂ければ幸いである。

拝啓 日本では既に秋の気配の濃い頃ではないかと思えます。ご無沙汰しておりますが、いかがお過ごしでしょうか。発掘地のメッセネから葉書を出してから早いものですすでに一カ月が経とうとしております。葉書が無事着いたのかどうか、実はいささか心もとないのですが、何もかもカオティックなギリシアのことですので。・・・ともあれ以下にこの一カ月の思い出を、報告を兼ねてお便りさせていただきます。

ヘレニズム都市メッセネはペロポネソス半島の西南に位置しています。現在の港湾都市メッシニよりも内陸にあり、東の隣国スパルタとの間には、タユゲトス山系の南の端が衝立状にそびえています。古代のメッセネはこの軍事国家スパルタとの抗争を繰り返していたのだそうです。巨大な山塊を越えてスパルタ軍が再度にわたり襲撃した理由は、メッセニエ地方の肥沃な土地

に惹かれたためとされています。メッセネはそれほど、考えていたよりもはるかに緑豊かな土地でした。山並みもアルカディアの荒涼とした景観と異なり、どこか線が優しく、波のような山々が幾重にも重なりゆうゆうと横たわっています。山の稜線が遠くほど青みがかってグラデーションをなし、最も向こう側の稜線が青いプロフィールを見せている様子は非常に美しく見えました。そんな山の一つ、イトミ山の中腹に我々の宿舎のある小さなマヴロマティ（黒い瞳）村があり、眼下の山あいの平野に、糸杉とオリーブに囲まれた神域が横たわっています。その全体の広大な印象や、あるいは銀緑のオリーブや山の色が夕暮れ時に変化していく様子の美しさなどは、私の筆では残念ながら思うように描写することができません。

メッセネは先に記したようにスパルタとの抗争を繰り返していたため、国力を弱めていたのですが、前四世紀半ば集団移住によって殆ど新たに創建し直されます。ヘレニズム時代に市は最盛期を迎えたとされ、中心となっていた神域の発掘が進んでいます。従来、聖域の主神はアスクレピオスであったと推定されていましたが、発掘総監督のテメリス教授（クレタ大学）は、この定説はおそらく誤りで、アルテミスの神域だったのではないかと考えているということです。

このテメリス教授を始めとする三十人ほどのギリシア人のチームが主神域の発掘に携わり、そしてもう一チーム、私が所属しているオーストリア人の発掘隊が、主神域からやや離れた「泉の家」の遺構を担当しています。この「泉の家」はパウサニアスが「アルシノエの泉」と名前を挙げて言及しているもので、古メッセネ市に飲料水を提供する給水施設であったと思われます。私たちのチームは教授二人、私を含む学生四人、ギリシア人労働者四人からなっています。

オーストリア隊の今年の一ヶ月のキャンペーンは、残念ながら目立った大きな成果はなく、一つの水槽跡を完全に明らかにし、他に予備調査的な仕事をしただけで終わりました。調査終了の際に友人が発したせりふを借りて言えば、宝探しは失敗に終わり、学術調査に成功したというわけです。出土品は建築部材の断片が数個とローマ、ビザンティンのコインが幾つか、そしてランプが一つ発見されたにとどまりました。

「泉の家」はおそらくヘレニズム期の遺構と思われます。改築が何度か繰り返されており、その際建築部材が再利用されているので、どこまでが創建当初の建築で、改築部分はどこからなのか、推定するのがかなりむずかしくなっています。水路システムの複雑さもあって、オリジナルの状態を正確に復元するのは至難の業で、掘る度に出てくる場違いの筈の壁跡や、あるいは、

掘れば必ず出てくる筈なのに一向に現れない壁跡や基礎跡などなど、今年は謎ばかりが深まったキャンペーンでした。私は未経験に加えてドイツ語にまだ慣れないこともあって、最初は何をすればよいのか困ることが度々あったのですが、次第に手順にも慣れてきました。結局発掘というものは、最初に掘り起こし、次に清掃、計測と記録、そしてまた掘り起こし、の連続とわかりました。掘りおこしは大抵の場合現地の労働者がやってくれますが、時には私たちがつるはしをふるうこともありました。床面などが出土すると刷毛で完全に清掃し、次いで計測しながら平面図を作図し、必要に応じて写真撮影を行います。

これが午前の仕事で朝六時半に開始、三十分の休憩を挟んで午後二時半まで八時間続きます。汗と埃で真っ黒になって宿舎に戻り、シャワー、食事となります。（村のレストランであてがいのメニューを頂きます。しかしトマトやメロン、西瓜、オリーブの美味かったこと！）一時間ほど休憩があった後、夕方五時から今度は美術館での作業で、出土した陶片などを洗浄し、主なものを図面にとります。夜九時まで続き、またレストランで食事です。全ての日程が終わると夜十時半をまわっています。年齢の違いを感じさせられたのは、ギリシア人の学生たちが（殆どは女子学生です）この上さらに、夜パーティーを催したことがしばしばあったことで、私は何しろ東洋人で目立ちますから、半ば無理矢理に出席させられます。ともかく一人だけ欠席するのはよくないように思われ、結局夜半近くまでつきあわされます。翌日はまた五時起きで炎天下で作業だなど思いながら、つきあうわけです。ともあれ酷暑と肉体労働と睡眠不足の猛烈にハードな一カ月でした。自由時間とプライバシーが殆ど皆無のため、予想していたとおりの一カ月があっというまに経ってしまいました。

ただこんな生活にもかかわらず、充実したとても楽しい毎日でした。私は留学後様々な国へ旅をし、日本では予想もしていなかったようないろいろな経験をしました。これほど楽しく過ごした日々は他になかったような気がします。ヘンリー・ミラーの『マルーシの巨像』の中に、精神を病む者は病院ではなくてギリシア（エピダウロス）を訪れるべきだというような一節があったように思います。私の留学も既に二年になり、私の場合はむしろ精神を病んでいたわけではないのですが、ともあれギリシアの開放的で、病的なもの、不安、孤独といった影の微塵もない自然な生活態度と、そして平和で苛烈な夏が、私は本当に好きになりました。田舎の人たちはことにまだとても善良で、期間中は労働者たちとも親しくなりました。楽しかった思い出に限りはありませんが、何回かの飲み会で見たギリシア人たちの踊りは

とても印象深いものでした。埃だらけの見るからに人の良さそうな田舎の年寄り、テープレコーダーの音楽に合わせて舞う即興の踊りは自然で自由で、麻葉のように繰り返される奔放なブズキと共に私たちを酔わせました。村人たちが気軽に踊りに加わって楽しんでいる様子は、例えば強烈な官能などといった南国に関する紋切り型のイメージとはどこか違って、もっと穏やかな何気ない自然な態度のものでした。こうした祭の際の平和でのどかなギリシアの田舎の雰囲気は、おそらくS先生もよくご存知ではないかと思われます。ギリシア人は子供好きで、祭の際も小さな子供たちが深夜近くまで大人と共に路上で遊びまわっているのですが、雰囲気がのんびりして見えるのはそうしたことも関係しているのかもしれませんが。私にはこんな貧しく自然なギリシアの田舎の生活がひどく心にしみました。

さて、八月末日の夕方、今年の全ての作業を終えて発掘地を後にした時のことでした。その時私たちは学生四人だったのですが、互いに全く名残りおいしいなどと言いながら、器材を整理して現場を離れました。まるで人を愛するように、自分がひっかきまわした土地に対しても強い愛情を覚えるということを知りました。担当した区画に対して文字どおり強い愛着をおぼえ、離れがたく感じられたのが、自分でも不思議な位でした。発掘地に最後の一瞥を投げて宿舎の方に向かいかけた時のことです。オリーブの繁る林の中で一瞬、胸中に鮮かに、古代の泉の家の光景が浮かびあがりました。つまりそんな気がしたわけです。耳元で何か物音がしたように感じられ、ついで蟬の声と泉水の迸る音が一緒に、耳を圧するように聞こえてきました。あたりには光が満ち溢れ、樹々の枝が風に揺れており、木漏れ日がときおり眩しく眼を射しました。林の向こうの陽射しの中に、古代の泉の家が見えました。数人の女性たちが立って水を汲んでいます。私が日頃陶器画で見慣れているのと同じ衣装を身にまとった、古代の女性たちでした。彼女たちの話し声が響きわたる泉水の音と共に聞こえた・・・ような気がしました。きっと疲れていたのかもしれませんが。

私は翌日先生や仲間と別れ、一人オリンピアを見てまわり、九月初旬にS市へ戻りました。

今思うと何だか夢のように通り過ぎてしまったのですが、ともかくこんな具合に今年の夏は終わりました。来週からまた研究所通いが始まります。既にS市では時にセーターが必要なほどになっています。北国の寒い冬が間近に迫っていることが実感されます。

日本でも今は天候の不順な頃ではないでしょうか。どうぞお風邪など召されませんよう、ご自愛ください。

敬具

一九九一年九月十四日 S市にて

拝啓 この手紙の着きます頃は、日本でも秋の深まりの感じられる時節ではないでしょうか。ご無沙汰しておりますがいかがお過ごしでしょうか。

私は一週間ほど前にギリシアから戻り、またS市の学生寮に入寮いたしました。一ヶ月のギリシア滞在中いろいろなことを経験しました。今年の発掘の成果に関する報告を兼ねて以下にお便りいたしたく思います。

今年の発掘では幾つか興味深い発見がありました。去年私は留学先のオーストリア・チームによる泉の家の発掘に携わったのですが、今年はスタディオンの発掘をするギリシア人チームに加えてもらいました。このスタディオンは今季初めて手をつけ始めた場所で、総監督のテメリス教授も大きな期待をかけていました。はたして三日目に早くも、ヘラクレス神殿とストアに挟まれた箇所、ヘラクレスのヘルメ柱が出土しました。様式から判断しておそらく紀元前二世紀のものではないかと思えます。作品の質が高く、鼻が欠けている他は保存もよく、基礎資料が公開されればヘレニズム彫刻史の大切な作例の一つとなるのではないかと思われれます。他の場所を掘っていた人たちも噂を聞きつけて集まり、現場は活気づき、人々は一日中上機嫌でした。

他に目だった発見としては、同じセクションからやはり前二世紀のものと思われる彫刻の台座が出土したことがあげられます。彫像そのものは欠けていますが、一メートル立法位の大きなポディウムには非常に念入りに仕上げられた刳形が付いており、また奉納銘の下に ΔΗΜΗΤΡΙΟΣ ΦΙΛΩΝΟΣ ΑΘΗΝΑΙΟΣという彫像の作者銘が美しく刻まれていました。

オーストリア・チームの泉の家の発掘も順調で、今年はブルドーザーを使ったため作業の進行が去年よりもずっと早く、遺構の全体像が一挙に明らかになりました。（今年はブルドーザー、来年はダイナマイトだ、と口の悪い友人の一人が言っていました。）コの字形の平面図をもつ泉の家は、二段かまたは三段の階段状に配された巨大な水槽を備えており、中央に幅広の階段があったと思われれます。発掘にあたっているF教授の話では、こうした巨大で複雑な水路システムを持つニユンフェイオンは、従来ローマ人の発明によるものと見なされていたそうで、メッセネにおける、このおそらく前二世紀に遡る遺構の発見は、こうした定説を覆す可能性が高いだろうということでした。

さて滞在中いろいろなことがありましたが、一番の騒動は大規模な山火事でした。八月最初の週末の土曜日のことで、私は何人かの仲間と共に近くのカラマタ市へ海水浴に出かけ、夜半に戻ってきたのですが、タクシーの窓か

ら数個の山々が燃えている異常な光景を目にしました。山並みの斜面に延々とのびる火の列ができており、黒々とした夜景の中で光が揺れて瞬いていました。丁度万里の長城を思わせるこの火の列は少しずつ横へ移動しており、列の片側を焦土に変えていたのです。火事は私たちの宿泊していた村や神域のすぐ近く、殆ど百メートルのところにまで来たのだそうで、海水浴に行かなかった友人たちは私たちの荷物をまとめて逃げる準備をしていたということでした。私は翌日、発掘と一緒に働いている現地のギリシア人労働者が、ぶり返した火事をくい止めるために鎌を手にし血相を変えて往来を走っているのを目にしました。（火事は二日間続きました。）親しい村の人々が大きな災害にみまわれているのを目のあたりにし、私たちは同情を禁じ得ませんでした。労働者の中には畑を失った者や、また死傷者も出たとのことでした。

火事の原因は放火でした。風の強い日をねらって五十キロメートルにわたる広域で、三カ所で同時に火の手が上ったのだそうです。ギリシア人の学生に聞いた話を総合すると、メッシニはギリシア国内でも肥沃な土地を有する豊かな地方として知られており、農業地帯の森林や畑をねたんで放火されたのだということでした。ともかくそういうことはこの国ではよくおこるのだ、ということでした。

翌週私は土曜の休みの日に一人で、六キロ離れたペトラロナ村へ遠足に出かけたのですが、山道の両側の斜面は延々と黒焦げの大地が続いており、あちこちにオリーブの木が真黒く焼け尽して残っていました。幾重にも広がる山並みが見渡す限り全て焦土と化している光景は、まるで爆撃の後のようで、火事の原因が人災であるだけに私の心を重くしました。

私はこんなことを思いながら、この道のりを一人歩いていました。私はギリシアとギリシア人が好きで、彼らと彼らの生活を愛しているつもりでいたのですが、私はただの旅行者として表面的に、いわばノスタルジックに、一時的な解放感に浸ってこの国を好んでいただけではないだろうかと思ったのです。実際のギリシアはあまりにも貧しく、例えば消防施設の不備は目を覆いたくなるほどで、村の人々は鎌や木の枝を持って走りまわり、巨大な火事を相手に殆ど無意味な戦いを続けていました。火事の原因についても結局のところは、EC諸国の中の最貧国に落ち込んでしまった経済上の破綻が理由になっているのに違いないように思われます。

八月の始めにメッセネへ到着したとき私は、去年の発掘で知り合った何人かの村人の懐かしい顔を見出し、挨拶を交わし、また銀色のオリーブや陽の光を浴びて輝く遺跡の石材を見て、喜びと解放感とに浸りました。また村の貧しく質素でのどかな、田舎らしい生活は、現代日本の生活様式が失ってし

まった大切なものを今なお持っているように思われました。村では驢馬が鳴き、鶏や羊が通りを横行し、村人はあくせく働かず、いたってのんびり毎日を過ごしていました。人々は道路上で行きかうとき、たとえ見知らぬ者同士でも挨拶を交わし、また物を買った後でも自然な調子で笑い、言葉をかけていました。それが私には非常に美しい習慣のように思われました。

村の人々はとても親切で、私たちはしばしばフィロクセノスの伝統に出会い、感動したものでした。私は発掘作業の一ヶ月の間、殆ど毎日、休憩の際にある労働者からパンやチーズ、果物などをもらっていました。彼らは人に親切にし、また鷹揚にするのが本当に好きなのでした。道ばたで出会う埃だらけの老人は、すれ違うとき私が「カリメーラ」と声をかけると、実に明るい顔をして、「ヤー」とか「ヤーサス」と答えたものでした。

異国の人間と接する際に、ギリシアの人々がいつも自分たちの流儀を固く守り、振るまうのが私には面白く思われました。彼らは自分たちのやり方、人を敬する仕方を信じており、どんなに遠い別の文化からやってきた人間に対しても、同じやり方が通用するのだと考えているようでした。人を遇するにはそれなりの仕方というものがあり、守らなければならない礼儀があるのだと人々が確信している様子が興味深く思われました。そういう態度には、相手が誰であっても、いつも単純な原則が守られているように感じられました。見知らぬ人に親切にするという一見単純に思われるモラルの持つ意味は、本当は非常に深いのもかもしれないと私は思いました。未知の人を歓待せよという教えは、つまるところ人間一般を疑うなという意味ではなかるうかと思われました。私はギリシアの田舎のこんな文化が、現代日本の文化よりも多くの点でマシではなかるうかと思っていました。夜中に宿舎のテラスに出て空にかかる満天の星を眺める生活を毎日続けたために、事態を単純化し、その国や社会のことを理想化して考えてしまったのかもしれない。

私にはどうやら別の文化圏へ出かけていくと、その国の、日本の文化と比較して優れている点ばかりを強調して考えたがる性癖があるようです。オーストリアに留学したての頃も、このギリシアでと同じようなことばかり考えていました。オーストリアにおいてもギリシアと同様、長く滞在するにつれ、暗い一面のあることを知るようになりました。考えてみれば当然のことで、どの国の人であっても日本人と同じように欠点や弱点があるのは当たり前のことなのかもしれません。実際にはそういった単純な話にすぎないのかもしれない。

ところで六キロの道のりを私が一人で出かけたのは、隣村のペトラロナ修道院を訪ねるためでした。これは創建がパレオロゴス朝に遡る、付近でもよ

く知られた古い教会で、内部には保存状態は必ずしも良くはないのですが、幾つか壁画も残っています。この近辺も今回の山火事の被害が大きく、修道院のすぐ裏手の畑も焼けてしまったのですが、建物そのものは無傷で残っていました。

この教会を訪れたのは実は二度目のことでした。山火事のあった数日前、マリア昇天祭の祝日に、Rさんたちと車で出かけたことがあったのです。その日私は教会で強い印象を受けました。

祭の日、教会は近郊からつめかけた人々で中も外も一杯になっていました。ビザンティン特有の地の底から湧きおこるような読経の声と、ひしめいている人々を見て、私はひどく心を動かされました。西洋人ばかりの中に一人で混じり、発掘の集団生活を始めたばかりで、私もいくらか感じやすくなっていたのかもしれませんが。老人たちは石に腰掛け、子供は所在なげに大人の足許にうずくまり、人々はあるいは立ち、あるいはしゃがみ、彼らの上に中庭の大きな樹が影を投げかけていました。あたりは、野生なのか、オレガノの香りに満ちていました。幾人かの顔見知りの労働者たちが見分けられました。私がある時感じたことはどうも書き表し難いのですが、ともあれ私は人々がそこに集まっている理由がよくわかったように思いました。私は自分も、その場にいる人たちと同じように、一人の人間なのだと感じたのかもしれませんが。言葉で言ってしまうと当たり前なことなのですが、その時にはいたって心を動かされたように思ったのでした。人々はさして好奇の色もなく私を眺めていましたが、私は慣れない異国の習俗の中に立って、随分遠いところまでやってきたように感じていました。

ともあれこの夏と昨年の二度の経験によって、私はどうやらフィルヘレネになってしまったようです。あのいたって騒々しく、万事につけカオティックなギリシアの人々がどんな神秘的な作用を及ぼすのか不思議にもなりますが、彼らの自然で自由な、あるがままの肯定感は、古代の文化にも同じ感性が見られるのではなからうかと私は考えております。

S市は既にセーターが必要なほどの季節になっております。日本でも今は涼しく過ごしやすい季節ではないでしょうか。とはいえ天候の変わりやすい頃とも思われます、どうぞお身体を大切にお過ごし下さい。敬具

一九九二年九月八日 S市にて